

引揚者となる人たちと歌の場面

―外地居留時、抑留時、避難時、引揚船内で、そして戦後日本社会で

そのとき歌い、そのとき聴いた〈そのⅢ〉

藤川琢馬（会員）

10. 東亜同文書院の名物“大旅行の歌”

大同学院4期生関猛夫氏の、学院時代の話である（『大同学院四期生会報』第参号）。「ある土曜日の夜中1時過ぎ、4人で新京から学院のある南嶺へてくてく歩いて帰る途中、黒田正明君から教えてもらったのが「大旅行の歌」だった。彼は同文書院の出だった。新京で飲んで騒いで、外泊する金を使い果たし、やむを得ず学院へ帰って寝るかということになり、馬車を拾って南関まで来たが、そのあと馬車夫は馬車を止めて、どう言っても動かない。無理もない、当時南関から南嶺の間にはときどき匪賊が出没した。やむを得ず我々は、南嶺まで4キロの道程を歩く次第となった。……人家一つと

ない暗闇の夜道は、行けども行けども果てしがない。酒の勢いも醒めかけてうんざりしているころ、突然黒田が大声で唄い出した。♪あらし吹け吹け 靸靸おろしーい 雪の蒙古にや日が暮れるうー
おい黒田、その唄なかなかいいじゃないか、教えてくれ、と、4人は匪賊のことも忘れて蛮声を張り上げ、この歌に陶醉しきっていた。私はこの歌を、今でもときどき唄うことがある。すると黒田君の、童顔でそのくせ視力の漲った、あたたかましい顔が浮かんでくる」。

大旅行の歌

嵐吹け吹け靸靸風し

雪の蒙古に日が暮れる

征鞍照す月影に

仰望ば空に雁の聲
ほんに忘れようか桂墅里の
可愛い稚子さんが目に躍る
殺氣満ちたる馬賊の唄は
何処で飲んだか酒臭い

（桂墅里とは創立当初に学舎があった地名）

同文書院の卒業論文ともいうべき伝統の「大旅行」の門出にあたり、「大旅行の歌」が歌われた。大旅行は、5期生（明治38年入学）のときから本格的に始まり、百数十日にも及ぶ長途の旅も多々、その意気すこぶる旺盛だったという。昭和16年12月に卒業した38期生山本隆氏が、大旅行に関して記している（『東亜同文書院生』）。旅行は、数名で一班を

作り、研究調査の課題と旅行予定を立てる。調査目的地には最低3週間滞在することが義務づけられていて、山本氏は3か月の計画で、県政治の実情調査をテーマとしたが、真の目的は、日本軍占領下の中国人が日本人や日本軍をどう見ているか、肌で知ることであった。5月下旬、北支方面へ行く班がいつせいに旅立つ日、校門付近には下級生全員が集合し、やがて、だれ歌うともなく大旅行の歌が流れ始め、大合唱となった。

11. 気宇壮大、生きる指針となった 校歌

満洲における学校の校歌はいずれも、歴史の彼方となってしまう。奉天第一中学校と奉天浪速高等女学校の校歌が表裏となったレコードが手元にある。奉天一中は私の父の母校で、父は4回生であった。昭和41年同窓会のなかで校歌のレコード化の話が出、奉天一中校歌については、私が関係していた合唱団が演奏し、浪速高女校歌はその同窓会有志で演奏され、レコードが製作された。私自身、歌はまあまあ出来だと思っていたが、母の言によると、父はレコードの歌に満足していなかったとのこと。そのわけは、19年後の父の死後になって気がついた。あの

時代盛んだった寮歌祭（1961年第1回（2010年第50回で打ち切り）に、私も父に同行したことがあった。父たちが過ごした蛮カラな中学時代・青年時代を考え、校歌の歌詞が、「五洲の民に先駆けて雄飛する男児」を謳うものであれば、レコードの男声合唱の歌はきれい過ぎたのである。中学校同窓生がいなくなるに及んで、彼らの校歌も消えてゆく。時の流れとはいえ、寂しいことである。

奉天第一中学校 校歌

1 千里の沃野天府の土

興安長白相望む

遼河の東藩の陽

輪奐高く雲に入る

2 英雄起る地の相

遼金元の故封疆

彼の前清の発祥地

学びの庭ぞ今やここ

3 螢の光窓の雪

理想は天に脚は地に

眼をさらす五大洲

思をひそむ四千載

4 羽翼は成れり雄飛せよ

五洲の民にさきがけて

雄詰高く叫ばずや

（作詞 内堀維文）

奉天一中の沿革は次のとおりである（創立50周年記念誌『榆の実』）。「大正8年関東都督によって奉天中学校設立が認可され、南満中学堂の校舎に同居して開校、同学堂長、職員とも両校兼務として出発、大正11年新校舎竣工して移転し、大正13年第1回生卒業、昭和11年奉天第二中開校により奉天一中と改称」。

南満中学堂は、満鉄が創設した中国人生徒のための学校である。奉天中学校校歌の楽譜には奉天一中校歌にない三番歌詞があり、全体で五番歌詞まであったが、三番の歌詞を省いて奉天一中単独の校歌とされた。

3 万邦一家春蘭けて

みな同胞と歌うとき

同文同種誼は敦く

並びて今ぞ栄えゆく

同校創立75周年記念文集『榆の実』に12回生石原美樹雄氏が、校歌の三番、すなわち中核部分が削除されたことに関して、『榆の実七十周年特集号』において小川清、斎藤弼州両先輩がこもごも語っているを紹介した。（校歌の作詞者であっ

た内堀校長）先生の考えとしては、南満奉天中学堂という名称の下に、中国人部、日本人部とし、同一校長の下で同一校舎、同一教師で日中両国の子弟が共学の実を挙げ、他日の両国親善の基礎となるべき人材の養成が理想だったと思われる」（斎藤）、しかし「……当時としては画期的で先駆的な大理想であったが、それが先駆的であったがゆえに当時満鉄当局は申すに及ばず、父兄にも、そして先生が最も愛され、最も望みを託された我々中学生にも十分な理解と同調が得られなかった」（小川）、（かくして南満中学堂と奉天中学校は分離され、内堀先生は日中共学の理想が実現しなかったのを理由に奉天中学校を辞任され、旅順工大教授に転じて行かれたのである）（斎藤）。小川先輩はこの経緯を総括されて、へもし先生が理想とし念願されたように……日本と中国の少年と一緒に教育することが許されたら、日本にも中国にも稀有の、二国民共同教育のすばらしい成果を挙げられたのではないかと、先生のためにも日中両国民のためにも大変残念に思う」と言っておられる。その後の奉天はただの進学校になってしまった、と石原氏はいう。

24回生田実和馬氏は、終戦から引揚げまでの苦労のなかで奉天一中の校歌に幾

度励まされ、鼓舞されたことかと次のように述懐する。「葫蘆島から引揚船に乗って、これで生きて日本に帰れると喜ぶと同時に、遠くに見える樹々の少ない中国の山肌を望みながら、いつの間にか心のなかで校歌を歌い始めていた。その後の人生も波瀾万丈だが、何とか生き延びているのも校歌のおかげではないか」と。

自校の校歌に関して幾人もの同窓生が文集等のなかでコメントしているが、これほど多くの人が言を寄せる校歌は珍しいのではなからうか。多くの校歌歌詞にみられるありきたりな表現では、校歌に対する深い思い入れは生じない。とくに、終戦後の艱難のなか生き延びる糧として校歌が自らを励ましたとは、そこまでの校歌はまずあるまい。青年への期待と激励をもろに身に受けた生徒たちの生き方を、校歌はまさに示していたからであろう。

12. 建国の理想をめづつた寮歌

引揚げ体験を記した宮尾登美子の自伝的小説『朱夏』のなかの一場面である。

主人公綾子（本人）は高知県から応募した開拓団の人たちとともに、昭和20年3月、彼らの子どもたちのための学校を作る役を担う教師の夫に伴われ、乳飲み子を抱えて渡満する。入植地は新京の東

北、列車で1時間余りの吉林省九台県飲馬河であった。創設した小学校に子どもたちを寄宿させ、この地で5か月強生活した。8月になって突然休校（閉鎖）の通達が来て、自決用の青酸カリもひそかに届けられていた。8月15日の終戦の報には触れないまま18日になって、日本が無条件降伏をしたことを知る。学校の解散に当たっては、教師たち、子どもたちが一堂に会し、「海ゆかば」を唱和した。じきに、あちこちの開拓団が掠奪に遭い、暴動に遭う。9月8日危険が迫った一団は、無一物のまま九台行きの列車に乗り、すでにその地にあふれていた避難民の群れの流れに押し流されるままトラックに乗り、営城子へ行く。営城子は日本の経営による営城子炭鉱があったところで、社宅にいた社員たちは財産を持ったまま集団で避難しており、綾子たちの一団は開拓団の人たちとともに、ある倉庫の中に詰め込まれる。ここでの避難生活においても暴民に襲われ、またソ連兵による掠奪にも遭う。約1か月後、学校関係者10名は廃墟となっている独身寮の4畳半1室に移された。

双十節（10月10日）を控えるころであった。ここで初めて寝たその夜、「綾子はふと、誰かが廊下を通りながらの『♪大い

なるかな満洲は、碧空緑野三千里、興安嶺を席捲し、渺茫として果てもなし』という低い歌声を聞いた。あれはたしか大同学院の寮歌のはず、昔、実家の客たちのなかに、それを知っているひとがあつて、いつも歌ってくれたもの、……』と記述する。大同学院出の誰かが逮捕を逃れ、避難民の間に身を隠していたのであろう。その人は引揚げ逃避行の中で、自分を見失わないようにと歌っていたのであろう。

大同学院寮歌「大いなるかな満洲は」

1 大いなるかな満洲は

碧空緑野三千里

興安嶺を席捲し

渺茫として果てもなし

嗚呼人生の朝にして

深紅の血潮音高く

無我至純なる若人の

天翔けるべき天地なり

2 城頭弦月傾きて

吸血の魑魅跳梁し

曠野満目蒼ざめて

盛京の地に影暗し

嗚呼億万の民生に

眠れる自治を呼び起こし

東天紅を告ぐるべき

久遠の任務吾にあり

3 自ら治むる精神の

透徹一呵するところ

暗雲たちまち消え去りて

旭光匝地輝かん

嗚呼旺なる吾等かな

立ちて理想の旗の下

協力必至東洋に

自治の楽土をうち建てん

自治の楽土をうち建てん

(作詞 鯉沼呢)

満洲建国を目指して設置された自治指導部に、思想の統一と魂の昂揚に役立つ、いわば「歌う憲法」というようなものを作りたいという要望があつて作られたのが大同学院寮歌「大いなるかな満洲は」である(フェルビー山口七海『ルーツ探しの旅』)。

「民族協和」の旗印のもと漢、満、鮮、蒙、日の青年たちが寝食をともにして研鑽し、卒業後は牧民官として辺境の地に赴任した者が少なくない。終戦によって処刑やシベリア抑留により亡くなった人も多いなか、幸いに引揚げることができた同窓生たちは互いに固い絆で結ばれ、戦後生活のなかで、家族同士のつながりも作られた。彼らが集うとき歌われた「大同学院寮歌」は、歌詞の言葉に共通

の想いを馳せ、かつて骨を埋める覚悟で建国に邁進した当時を思い、連帯をいっそう確認し合うものであった。

大同学院11期生磯部昌一氏は「寮歌」について触れている(『久遠』)。「大同学院に入って寮歌を教えられたとき、私は母校の校歌の歌詞と極めて似通っていることに気づいて大へん親しみを覚え、卒業後の任地においても、常に感激を以て唄ったものである。終戦後帰国したとき、寮歌の作詞者鯉沼呢氏が、浦和高校第1回卒業(大正14年3月)の大先輩であることを知った。ちなみに私は、同校第11回卒である。私は早速鯉沼氏に手紙を差し上げてお尋ねしたところ、寮歌の作詞にあたり、青春の感激をこめて絶唱した校歌の感動が胸中に宿っていた旨のご説明を承った。……学院創立60周年式典の行われる今年は、奇しくも浦和高校の創立60周年に当たる。私が青春時代の純粋な情熱を味わった母校の校歌と寮歌が、一つの源に発していることに對し、私は心からなる誇りを抱いているのである」。

大いなるかな武蔵野は

天の紺碧 地の緑

渺茫として果てもなし

あゝ人生の朝にして

自由の翼 音高く
理想の国を天翔ける

我等に何ぞふさわしき

美しいかな天地

大いなるかな我等

大同学院寮歌の歌詞は、学院精神そのものであり、卒業生たちがかつて満洲建国に命をかけた心のよりどころであるため、彼らの多くが往時を振り返るとき、寮歌の歌詞を引き合いに出している。14期生栗山誠司、同坂本不二男、17後期生加茂野興七、同武田實の各氏は同窓会誌『久遠』に寄稿し、学院精神や思い出を語っているが、とくに共通して引き合いに出している歌詞の言葉は、「無我至純」である。

13. 戦後社会と引揚者

鴨下真一著『誰も「戦後」を覚えていない』は敗戦後の社会を思い出させる。同書および『現代世相風俗史年表』によって、敗戦後食住の状況を以下に振り返ってみる。

昭和20年は大正・昭和期を通じて最大の、未曾有の凶作の年だった。コメの収穫量は前年比68・8%、供出量は予定量のたった23%で、昭和21年の飢餓状態は決定的だった。毎日すいとん、雑炊が続

き、焼け跡という焼け跡は畑となり、作るものはカボチャ、イモ、とくにサツマイモ。カボチャは葉も種も、イモはつるまで食べられた。5大都市での餓死者は733人。住については、空襲によって焼かれた家屋は全国で210万戸（別数値246万戸）で全体の15%、強制疎開で壊された家屋は55万戸、合わせて270万戸の家がなくなっていた。それに、海外からの引揚者が必要としたのが67万戸、戦時中は建築が全く行われなかったから、そのための自然減不足分が118万戸、合わせて450万戸の家が必要だった。したがって、間借りが当たり前だった。間借り暮らしは監視し監視される生活で、食べ物、子どもがいれば子どものことで、家主とのいざこざが起きる。

食糧にしても家屋にしても、不足分の平均的数値があっても実態は偏在しているので、不足状況ははるかにひどい。鴨下氏は、終戦直後の日本の基調音となったものの重要な一つは、「不公平」という感覚だったと述べる。戦死した人と無事で帰った人、抑留された人と帰国できた人、闇でもうけた人とそうでない人、焼け出された人とそうでない人、たらふく食べている人と飢えている人、……。被害をこうむらなかった人もいて、不公平

感の源はすべてここにある。しかし、嘆くことよりも生き抜くことが優先した。

一体、引揚者と国内の人とはどちらが大変だったのか。引揚げの特異性や多様性を追究した辻輝之氏の研究（島村恭則編『引揚者の戦後』）のなかで、18歳で終戦を迎えた倉本和子による自伝的小説『満州の遺産』の記述が紹介されている。

昭和22年2月、大連から佐世保に引揚げてきた倉本さんの家族は、大分にあった父の生家に身を寄せた。叔父の太郎は、「外地に行っとんたもんは爆撃のこわさを知らんで済んだけえのう……B29は満洲までは行かんじゃったじゃろうけ」と、満足げに一人うなずいた。辿り着いた父の生家で、太郎の目に留まったのは、私達が背負って帰ったリュックサックだった。……大連では着物は売れても帯は売れなかった。売れ残りの帯を利用したのだった。……「贅沢なもんやなあ……あんたら引揚者ちゅうのんは」と、溜め息まじりに言った。

もう1つの例証が宮尾登美子の前記『朱夏』の巻末に記述されている、詩人・評論家の嶋岡農と宮尾とのインタビューである。嶋岡はインタビューの入口として、宮尾が引揚げという貴重な体験の素材を持っていたのに、なぜ小説の執筆が遅かったのかと尋ねる。「……収容所生

活の中でなんとか命がらえて、日本に帰らなかった。……ほんとうに地獄の底をはいずり回ったようなことを何で忘れてなるものか、……私はすごい体験をしたぞ、これをみんなに知らせてやらなくちゃならないぞという感じで、意気揚々と引き揚げてきたところがあるのね。日本に還ってきたのは昭和21年の秋―9月の21日、日本も疲弊していました。戦争の悲惨な傷跡もまざまざでした。そこへいって、私が満洲体験を人に話すと、みんな聞きたくないと言わねえんです。生々しすぎるから……。いや、苦労したのはお前さんだけじゃないよ、内地にいる者だってすごい苦労したから、なにも満洲だけが苦労じゃないよという……。そこで私はちょっと萎縮したんです。話しちゃいけないかなという感じはあったんです」。

内地の人は内地の自分たちを、引揚者も自分たちを、大変な苦労をしてきたとそれぞれ相手に対して相対的に、不公平感をもって捉えている。とくに終戦近くになると、相互に情報が伝えられていない状況となっていたから、無理もないことである。

安岡健一氏は自身の講演「引揚者と戦後日本社会」において、「戦争犠牲」の内容について、その記憶が国民の共通経験でなかったことは、引揚者が日本の戦

後社会に定着してゆくうえでの問題を提起していたと指摘し、定着の過程に関して、次のような論を提示している。すなわち、引揚者は戦後日本社会から「排除」されたわけではないが、だからといって単に「包摂」されたのではない。「包摂」の概念は2つに区分でき、1つは、「差異」を帯びるものがそのことを隠さずに生きていける、それが承認されていく「受容」というもの、もう1つは、その差異を放棄して同化する限りにおいて、共同体の成員として承認するという「包囲」というもので、引揚者たちの戦後の生き方は後者に近く、スムーズな定着のために沈黙が選り取られたとする。

引揚げ前後の人口動態について、石田淳氏の分析を次に引用する（荻野昌弘編『戦後社会の変動と記憶』。戦争末期の本土空襲によって、国全体の有形資産の4分の1が失われた状況下、昭和25年までに、終戦時海外邦人数約660万人のうちの94%に当たる624万人の帰国がなされ、同時期、植民地出身者などの海外送出者数約130万人を差し引いて、500万人近い人口膨張が、敗戦後の短期間に起こった。より具体的には、自然増加数と社会増加数とに分け、社会増加数は昭和21年に347万人、22年100

万人、23年32万人、24年15万人、25年3万人と推移し、この5年間で497万人の増加であったのに対し、自然増加数は昭和21年21万人から22年146万人、23年172万人、24年176万人、25年153万人と、ベビーブーム状態が続き、5年間に668万人の増加であった。すなわち、昭和20年11月1日の推計人口7215万人に対し、5年後の昭和25年には、8412万人と推計され、5年間で実に1197万人の人口増加が起こった。

石田氏によると、敗戦間際から、都市部の戦災や窮乏から逃れるために農村部への人口流出が起こり、引揚者・復員者の多くも農村部に吸収されたため、余剰人口の失業問題は顕在化しなかったという。都市人口の抑制を促進するため、人口10万人以上の都市への転入制限が昭和21年以降実施されたと紹介する（「都会地転入抑制緊急措置令」）。

このことで私は、わが一家の場合を思い出した。すなわち、引揚げて母方の郷里諏訪に身を寄せていたわが5人家族は、代々木上原の親戚宅（そこも借り家だった）に転がり込んだが、法令に基づくものだと知ったのは本稿執筆に際してであった。

終戦をはさんで起きた大地震について、

被災地は別として、日本全体としてはあまり印象がないのではなからうか。前記鴨下著によると、昭和19年12月7日、紀伊半島東を震源とする深さ30キロ、M7.9の東南海地震と津波が起こり、静岡から三重にわたって1000人近い死者や、2万戸前後の住宅被害があったが、戦時中の報道管制のため、遠方に広くは知られなかった。さらに昭和21年12月21日には、九州から愛知まで被害が及ぶM8.1の南海地震と津波が起き、死者1300人以上、家屋全壊2万戸以上の被害を出している。兩年とも極めて逼迫した国内状況の中にあり、そのダメージはいかばかりであったろう、空襲、敗戦と続く悲劇の上塗りにはやりきれない思いがある。

14: 戦後世相と替歌

「歌は世につれ世は歌につれ」というように、歌はそのときどきの世相の反映であり、歌の流行には必ず社会的な背景がある。世相の推移と関連して、流行歌もその都度、形を変えていく。一方替歌は、わが国特有ではないにしても、日本の伝統的唄文化の所産であった。都都逸など歌詞の定型性は替歌創出の基盤そのものであり、これら伝統的音曲のみならず、明治期以降の軍歌、唱歌、演歌に対

して作られた替歌は、庶民・大衆の感覚と正直な想いを赤裸々に表現する。替歌は、庶民が生み出した庶民自身の歌で、いっそう直接的に、庶民・大衆の心情をうかがい知ることができる（『占領期生活世相誌資料Ⅲ』）。

この『生活世相誌資料』は、「異国の丘」ほかの替歌が掲載されている資料を紹介している。替歌の対象にされるといふことは、その曲の流行の度合いを測る、ひとつの指標でもある。その点で「異国の丘」の存在感は大きく、引揚者も含めて当時の大衆の心情に触れることができるのは興味深い。替歌が生まれてくる陰には、ヒット曲を歌った満たされない大衆がいた。戦中においては、抑圧された大衆が軍歌を皮肉り、戦後においては、窮乏した庶民が流行歌を餌にした。それに対して、歌が氾濫し短命になった現在では、大衆がかつてのような精神的・物質的状况になく、大衆のエネルギーは感じられない。替歌を生む社会的素地が変わってしまったのは幸せなことではあるが、当時の社会が懐かしく思えるのは、単なる懐古趣味によるのではなく、庶民が等しく生活に困窮していた共通の社会環境にあったなかで、共感と連帯があったのに対し、現在ではそれらが失われてしまったと思うからで、寂しい。

かつて、大正12年関東大震災が起きた直後、演歌師たちは焼け残った印刷所で刷った唄本を手に、焦土と化した東京下町の街角に立ち、急遽作られた「大震災の歌」や「復興節」を歌った。人々は食の飢えもあるが音にも飢えていて、粗末な唄本に飛びつき、「復興節」はたちまち人々に歌われたという。この唄は焦土風景やバラック生活を歌ったものだが、食料の配給（無料）の前には奥さんも嬢もなく一視同仁、生活の格差をなくした平等感に一種の和みさえ感じたという（添田知道『演歌の明治大正史』）。

被災者、引揚者が置かれた戦後社会の世相は、関東大震災時と一脈通じるところがあったであろう、流行り歌に飛びつき、たちまち替歌を作った。それらの幾つかを、以下に転載する。

「リンゴの唄」替歌

赤いリンゴの 露店の前で
だまって見ている 青い顔
リンゴの値段は 知らないけれど
リンゴのうまさは よくわかる
リンゴ高いや 高いやリンゴ
（『流行歌でつづる日本現代史』）

「異国の丘」替歌1

夫の歌える

今日も暮れゆく かまどの前に
妻よ辛かる、せつなかる
我慢だ待つてろ 会社の月給
もらう日が来る いつか来る
妻の歌える

今日もきのうも 配給はあれど
買うに買われぬ、空財布
泣いて笑つて おかゆで堪えりや
足はふらつく 日はかすむ
『読切講談世界』第二卷一〇号

「異国の歌」替歌2

異国のウオツカ

1 今日もくらった異国のウオツカに

友よつぶれてせつなかる

かぐんで吐いてる背中をなでりや

帰れ帰れとボリが来る

2 今日も過した異国のウオツカに

女房おもへば身もちぐむ

泣いて誓つて土産見せりや

だます手もある術もある

3 今日もあをつた異国のウオツカに

重い足どり目が赤い

倒れちやならない吾が家の床に

たどり着くまでもぐるまで

『小説倶楽部』絢爛豪華特別号

「夜のプラットホーム」替歌

朝のプラットホーム

1 重いリュックの 底ふかく

何んですか 米でしよう

プラットホームの 一斉検査

さよなら さよなら

泣き泣き帰る

2 ひとに推されて 突出され

行つてしまつた 満員電車

ハット気がつき ポケット見れば

さよなら さよなら

紙入れはカラ

『女性の友』第二卷三号

おわりに

「引揚者と歌」という、ふつうには脈絡があるとは思えない、思いつきの着想から筆を起し、研究資料『引揚者と歌の場面』として作成することができた。

本稿はその一部に手を加えたものである。引揚者となる人たちが外地に居留していたとき、また終戦により余儀なくされた

抑留・収監や逃避行で、避難生活で、あるいは引揚船の中で、そして日本に帰還したあとの戦後社会のなかで、歌い、聴

き、出会い、あるいは係わった数々の歌とそれぞれの場面を通じて、人々の思い

や、当時の社会の実相を振り返ってみることができないかと思つたのである。流行歌、唱歌、国歌・建国歌、校歌、愛唱歌、わらべうたなど、これらの歌をご覧いただき、関連して歌が思い出されたり、当時の思い出が浮かばれば幸いである。また、「引揚げ」というわが国の記憶を歌とその場面から、一端でも記録することができたなら、幸いである。

本稿では「中国残留日本人」が作つた歌も収載した。根は日本、育ちは中国という2つの故郷を持つ彼らが希求する世界の平和は、彼らにとって共通して、まさに「肌」から願ひ出された強い訴えであるので、特記した。

原著では可能な限り歌詞、楽譜および音源をそろえるよう努めたが、それがかなわないものもあり、本誌上では制約もある。機会があればこれらの歌をお聴きいただきたいと思つている。なお、みなさまから歌の情報をお寄せいただければうれしいことである。

(完)